オポナカムラ彩発見!!

オポナカムラは古代語で「大中村」の意。
国指定史跡「大中遺跡」の最新の調査をもとに、様々な観点からふるさとの誇れる遺跡について考えてみたいと思います。

【問い合わせ】郷土資料館 ☎079（435）5000

出土した石の道具

播磨町マスコットキャラクター
いせきくん、やよいちゃん

7 道具からみえる弥生のくらし

旧石器時代（2万年以上前）から人々は、大中遺跡やその周辺で狩りをしていました。遺跡周辺から見つかったナイフ形石器は、肉や皮を切るために使っていたようです。石は、鋭く割れて刃こぼれしにくいサヌカイトでつくられ、四国の香川県から運ばれてきたものです。

縄文時代（1万数千年前）になると、気候が温暖化したため、氷河がとけて海面が上昇し、生活環境は大きく変わりました。大型動物が絶滅したため、イノシシやシカなどの中小動物をとって食べるようになりました。動きの早い動物を射止めるため、弓矢をつくり狩りをしています。大中遺跡からは、矢の先に付けたやじりが数多く出ていますが、やじりは、狙った動物に命中せず失敗したものです。

弥生時代の前期や中期にも、大中遺跡から土器や石でつくられたオノ、やじりなどが出土しており、小さな村があったようです。後期にできたオポナカムラ（大中遺跡）からは、木を切ったり削ったりするための石の道具や、稲刈りをするための石の道具はみつかっていません。道具を使わずに生活していたとは考えられず、石の道具は鉄の道具に変わっていたのでしょう。鉄の道具がほとんど出ていないのは、鉄を何回も再利用していたり、道具が長い年月でさびて腐ってしまったりしたからです。

使われていた石の道具は、石や鉄を磨く砥石、まな板として使われていた調理用の台石などです。鉄の道具は、木を削るためのヤリガンナや魚をとるためのヤス、やじりなどが出土しています。鉄のやじりは、石のやじりよりも鋭く、突き抜ける力も強いので、弥生時代から武器として盛んにつくられるようになりました。石のやじりも、大きくて重いやじりがつくられるようになり、戦いに使われていました。

また、水田をならす木のくわや土を掘りおこす木のすきなどは、腐ってしまったのか出土していません。

環境の変化に対応して新しい道具をつくり出し、生活を豊かにしてきた古代の人たちの知恵とたくましさは、私たちも受け継いでいきたいものです。

広報はりま 発行／播磨町役場 〒675－0182（個別番号） 兵庫県加古郡播磨町東本荘1丁目5番30号 TEL 079（435）0355 FAX 079（435）0609 編集／企画グループ 印刷／明光印刷
播磨町のホームページアドレス http://www.town.harima.lg.jp
〃 Eメールアドレス kikaku@town.harima.lg.jp

PRINTED WITH SOY INK
Trademark of American Soybean Association

町の人口 9月1日現在（住民基本台帳人口＋外国籍人口）
34,220人（－20人） 男…16,796人（－34人） 女…17,424人（＋14人） 世帯数…13,628（－3）